



TITLE:

教育空間創造ユニット:野殿・童仙房での生涯学習の取り組み 2007年度

AUTHOR(S):

前平, 泰志

CITATION:

前平, 泰志. 教育空間創造ユニット:野殿・童仙房での生涯学習の取り組み 2007年度. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 64-65

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179729>

RIGHT:

野殿・童仙房での生涯学習の取り組み 2007年度

Q 1. 当地域での活動はどのような主旨でいつから行われているのでしょうか。

A 1. 2006年度より始まっていますので、今年は2年目になります。2006年3月に廃校になった野殿童仙房小学校を拠点として、地域の方との協働で新しい空間創りを始めています。地域で「野殿童仙房生涯学習推進委員会」が立ち上がり、2006年6月23日に京都大学院教育学研究科と野殿・童仙房地域が協定を結びました。行政主導型ではなく、地域住民と大学と一緒に関わりながら、生涯学習とは何か、学びとは何か、ということ問い直し、地域が抱える問題とも向き合いながら、子どももおとなも一緒に学んでいけるような空間を、そして私たちの生活と学習を結びつけるような空間を、自ら積極的に創っていかうとしています。

Q 2. 野殿・童仙房についてもう少し詳しく教えてください。

A 2. 京都府相楽郡南山城村に位置します。京都府の最南端に位置し、現在では京都府で唯一の村となっています。南山城村の人口は約3,500人で、野殿・童仙房地域では、約110戸、約350人の方々が住んでいます。標高500メートルの高原で、主産業はお茶で、椎茸、トマトなどが特産品です。野殿は古くからある土地ですが、童仙房は明治時代に京都府によって開拓された土地です。

Q 3. 今年度はどのような活動が行われたのでしょうか。

A 3. 「風と雲の広場」という催しを行いました。また、農業体験は2年目を迎えました。また、夏には工学部の合宿、秋にはエクステンション講座なども実現することができました。

Q 4. 「風と雲の広場」とは何でしょうか。

A 4. 4月末に第1回目を、7月は台風のため中止になったので、10月に第2回目を開催しました。「風と雲の広場」は、子どももおとなも地域内外から気軽に集うことができ、童仙房という自然の中で、勉強でもない遊びでもない、あるいは勉強でも遊びでもあるような場を創ってみようと思ったものです。第1回目は、地域通貨「チャオ！」を使った取り組みと自由なマーケットが中心でしたが、第2回目は、それらに加えて、エクステンション講座や紙コップを使った「虹色万華鏡？」を作るコーナー、地域の音を使った音楽創作、地元の和太鼓グループによる演奏など、参加者の幅も中身も充実したものになりました。

Q 5. 地域通貨「チャオ！」とはどのような取り組みでしょうか。

A 5. 簡単に言えば、各自で持ち寄ったものの物々交換の広場です。1つの物を持ってくると、1「チャオ！」がもらえます。その「チャオ！」を使えば、



「チャオ！」の広場にあるものはどれでも1「チャオ！」で交換することができます。多物一価の仕組みです。子どもたちは、この「こうかん」をととても楽しみにしています。10月には物にメッセージをつけるという試みも行いました。地域通貨は、法定通貨や市場の原理とは少し違った意味をもたらしてく

れます。これから、新しいコミュニケーション・ツールとして「チャオ！」の仕組みも進化させながら続けていきたいと思っています。



Q 6. エクステンション講座では、どのようなことが行われたのでしょうか。

A 6. エクステンション講座とは、大学などが別の場所で公開講座などを行うことですが、もともと「エクステンション」は農業改良事業から派生した言葉で、アカデミズムの学問の農学が現場の農業と乖離しすぎたため、大学を離れて現場に行き現場から学ぶことが求められたところから始まったものです。童仙房でも第1回目のエクステンション講座として、京都大学総合博物館の大野照文先生が来てくださいました。子どももおとなも一緒に、三葉虫の化石をスケッチして、どのように身を守ったか、どのように脱皮したのかなどを考え、化石の世界にタイムスリップしました。大野先生の魅力とともに、探究していくことのおもしろさの一端が伝わったのではないのでしょうか。



Q 7. 音楽の企画とはどのようなものなのでしょうか。

A 7. 地元有志の親子による和太鼓グループ「野童太鼓」のメンバーが力強く演奏してくれました。また、教育学部の学生もメンバーの一人である音楽創作ユニット「rimacona」は、自分達のオリジナル曲に

加えて、地域を歩いて音を録音し、編曲した音楽も演奏してくれました。音楽という媒体を通じて、地域の素材が生かされていくきっかけになったのではないのでしょうか。

Q 8. 〈虹色万華鏡?〉を作るコーナーとはどのようなものなのでしょうか。

A 8. 紙コップに特別なフィルムを貼り、反対側に黒い画用紙を貼って穴を開けると、虹色の世界が現れます。穴の開け方で光の見える方も異なってくるので、子どもたちは楽しそうでした。また、ストローと紙コップを使って音が奏でられる〈ストロンボーン〉の工作もありました。この企画は、大阪府立千里高校の非常勤講師をされている江角陸先生のご協力により実現しました。



Q 9. 料理の企画があったと聞きましたが、どのようなことをされたのでしょうか。

A 9. はい。「味覚と他の感覚を重ねあわす—もうひとつの生涯学習」ということで、銀閣寺近くの創作和食料理店 sun-aid Eisuke の店主、阿山哲生さんのご協力のもとに6月に実現しました。旬の味を生かした料理を味わおうということで、料理の実習から講義までが行われました。「食」には、作る過程も含めて、味覚だけでなく、音、匂い、触る、見るなど様々な感覚が重ねあわされていることに改めて気づかされました。また、阿山さんは地域から発信できるものを、という思いから、当地の特産であるお茶と猪肉を組み合わせて「猪肉のお茶の葉燻製」という料理も創ってくださいました。今年の農業体験の収穫祭にも、大根やさつまいもなど収穫した野菜を使った料理作りに一緒に関わってくれました。

Q 10. 農業体験について教えてください。

A 10. 「昔子どもだったおとなと今の子どもと未来の子どものための農業体験」と銘うった農業体験は、昨年に引き続き2年目となりました。この取組みは、農作物（そして、いのち）が育っていく驚きといのちを育てる労働の喜びを、子どもたちに知ってもらい、この経験を次世代の子どもたちに伝えてほしいという願いから発したものです。間引き作業など、皆で関わりながら育てた野菜を、収穫祭では料理をして一緒に食事をするという時間は、なんともいえない喜びがあります。南山城村の秋の祭典では、野殿童仙房生涯学習推進委員会として地域の人と一緒に出店しました。今年はあまり立派な大根が育たなかったという失敗もありましたが、それもまた逆に私たちに多くの話題とコミュニケーションをもたらしてくれました。

Q 11. 工学部は、どのような目的で童仙房に行ったのでしょうか。

A 11. 9月に「京都大学材料工学スクール夏季合宿」が行なわれました。「材料工学スクール」は、2年ほど前から、社会における材料を学生にも目に見える形で伝えるために、専攻全体で参加企業を募り、松原英一郎教授を中心として、冬期フォーラムやリレー講義などに取り組まれているものです。その夏季合宿の場所として、童仙房が選ばれたのです。テクノロジーとは遠く離れたこの童仙房に、京都大学工学研究科材料工学の教員、院生21名と、関連する企業十数社の若手研究員13名が集い、寝起きを共にし、これからのテクノロジーについて考えてみようというおもしろい企画です。企業からのプレゼンテーションや参加者の自己紹介が続いた後も、夜遅くまで、懇談が続きしました。この企画には、教育学研究科の教員、院生、地域住民の方も参加しました。異質な出会い・交流が生まれ、テクノロジーと地域について語るよい機会になりました。



Q 12. このようにしてみると、色々な分野の方からの関わりが生まれているようですね。

A 12. はい。この活動に関心を持ってくださる方が地域内外、大学内でも少しずつ増えてきていることは大変うれしいことです。色々な人の体験や知恵が生かされていく、それがこの空間を創っていく楽しさ・醍醐味でもあると思います。様々な関わりやコミュニケーションが生まれていく中で、野殿・童仙房という空間自体も育ちつつあるといえるのではないのでしょうか。

Q 13. 今後の活動予定はどのようなものなのでしょうか。

A 13. 3月の初めに、地域住民の方と教育学研究科の教員・院生とが一緒にこれまでの活動を振り返り、今後の活動について考える機会をもちます。地域の方から院生の声を聴きたいというご意見もいただいています。当活動では、野殿・童仙房地域と大学とが少し離れていることもあり、対面での話し合いの他に、メーリングリストを使って活動の企画相談や議論も行っています。すでに2000通近くになっています。昨年度、「フィールドを立ち上げる」ということでスタートしたこの取り組みですが、3年目を迎える来年度は、また新たな展開が生み出されればと思います。

(文責：前平 泰志)